

対馬学フォーラム 2019 報告

佐藤 安未加

1. はじめに

対馬学フォーラムは2019年12月8日に対馬市の対馬交流センターで行われた、対馬に関する研究や実践活動の成果、今後の構想などを発表する場であり、年に1回開催されている。今年は55本のポスター発表が集まったという。ここでは発表だけでなく、同会場内で巴山剛氏による「海ごみ三味線」パフォーマンスや、対馬の高校生を対象に島外の大学による出張型オープンキャンパスも開催された。

2. 特別報告

午前は、今回の対馬学フォーラムの特別報告として5本の発表が行われた。発表されたのは、対馬市立仁田小学校の「仁田史の継承者になろう」、対馬歴史研究会の長崎奈々子氏と長崎章氏の「親子で探る対馬の遺跡」、長崎県立対馬高等学校の「ESD 対馬学の取り組み」、富山国際大学現代社会学部の助重雄久教授の「離島の観光振興とリスクヘッジの必要性—対馬と宮古島等の事例から考える」、九州産業大学地域共創学部の千相哲学部長/教授の「対馬における日韓観光交流の意義とこれから」の5本であった。

3. ポスター発表

午後は、ポスターの出展者がそれぞれで作成したポスターの前に立ち、他の参加者や来場者に閲覧してもらいながら質問に答え、意見や交換を行う時間であった。ポスター番号の奇数と偶数で前半と後半に分けられ、1時間半ずつ時間が設けられた。

私たちは「ESDを通じた対馬市の地域創生の可能性と課題」というテーマでポスター発表に参加した。夏に立教大学ESD研究所の阿部治所長と、立教大学社会学部現代文化学科の学生7人で対馬に4日間滞在し、現地では体験できない様々な活動を通して初めて知ることや感じたことが多くあった。この経験から、私たち島外から来た学生から対馬でのESD活動を見て、ESDを通じた地域創生の可能性と課題について考察した。今回は行った活動の中から「神宮自然農園での体験から感じたこと」、「ツシマウラボシシジミ保全活動作業と意見交換を通しての考察」、「小学校におけるESD授業の見学から感じたこと」の3つを挙げ、それぞれの具体的な活動を記載した。アクションリサーチで実際に現地を訪問し調査を行うことで、対馬の教育や環境などの課題や魅力について当事者意識をもって考えることができた。ESDを通じた地域創生の可能性として、“当たり前”を問い直すきっかけを得たこと、当事者意識を育むことができること、幅広い地域に関心をむけるき

っかけづくりになることの3点を挙げ、課題として、地域格差が生まれる可能性があること、人手不足であることの2点を挙げた。

4. 出張オープンキャンパス

今回の対馬学フォーラムでは、島外に出て各大学のオープンキャンパスに訪れることが難しい対馬の高校生のために、フォーラムに参加している大学生がパンフレットを配ったり、勉強や学部についての質問に答えたりと出張型の大学説明会が同時に開催された。我々も立教大学の代表として、高校生からの疑問に答えたり、大学はどういったことができる場なのかを説明したりした。また、大学生活の過ごし方や受験勉強の方法などについての質問もあった。多くの高校生が立教大学の外観や学部に興味を持ってくれたようで、パンフレットが足りなくなるほどの盛況ぶりであった。島外の、さらに関西や関東などの離れた地域の大学について知る機会はほとんどないので、対馬の高校生にとって有意義な時間になっていれば非常に喜ばしいことである。彼らにとって都市部の大学に進学することは勇気がいると思うが、そこで生活することにより、対馬の魅力の再確認に繋がり、島に戻ってくる若者の増加のきっかけになるかもしれない。そういった意味でもこうした大学の説明会は良い取り組みであると感じた。

5. まとめ

対馬学フォーラムに参加することで、島内外問わず多くの人が様々な研究活動を行っていることを知ることができた。そして、発表者の方々と意見交換をすることで、新たな視点を学び、取り入れることができると感じた。今年度は55本のポスター発表があったが、これほど多くの研究を知ることができる機会はとても貴重であり、対馬の魅力等について再確認できる場であるため、今後も継続してほしいと感じた。

(さとう・あみか 立教大学社会学部現代文化学科 3年 阿部治ゼミ)

ESDを通じた対馬市の地域創生の可能性と課題

立教大学社会学部3年 阿部治ゼミナール ○佐藤安未加、○関玲那、内田陽子、川島優大、
末原悠芽、瀧尾光宏、中島孝平、ヒョン・スジン
(引率・) 指導教員：阿部治 (立教大学社会学部教授、同ESD研究所所長)

【目的】

人づくりを地域創生の根本に据えた取り組みを行っている対馬市において、アクションリサーチを行い、ESDを通じた地域創生の可能性と課題を探る。

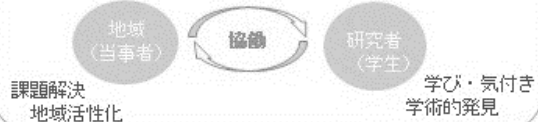
【方法】

2019年9月16日から9月19日に、立教大学阿部治教授と同ゼミナールの学生が対馬でアクションリサーチを行った。実際に現場に赴き、保全活動へ参加し、ヒアリング調査などを行った。(以下、アクションリサーチ日程表(抜粋)を参照。)

アクションリサーチ日程表(抜粋)	
1日目	神宮自然農園訪問①
2日目	対馬野生生物保護センター訪問 ツシマウラボシシジミ保全作業② ツシマヤマメコ観察
3日目	対馬市立仁田小学校訪問③ 海洋プラスチック汚染現場見学 対馬高校ユネスコスクール部との交流③ 民泊
4日目	野鳥観察 厳原北小学校訪問③

アクションリサーチとは?

アクションリサーチとは、**地域の当事者と研究者(学生)が協働し課題解決を目指す、実践的研究方法**である。今回は実際に対馬市で学んだ地域課題について、学生の目線から考察する。(参考サイト：別紙参照※1)



【結果】 ☆：各調査におけるキーパーソン

①神宮自然農園訪問



- ☆神宮正芳氏(自営業・エコファーマー)
 - ・畑、赤牛、鶏、ニホンミツバチなど自然農園の見学
 - ・鶏の屠殺体験
 - ・アスパラガス収穫体験
 - ・郷土料理「いりやき」など、島暮らし料理作り

“当たり前”を
問い直すきっかけづくり

【ESDを通じた地域創生】

多くの人を巻き込み
将来に繋げていく



②ツシマウラボシシジミ 保全作業と意見交換

- ☆神宮周作氏(対馬市文化交流・自然共生課主任)
 - ・ツシマウラボシシジミ保護区の見学
 - ・食草のケヤブハギ・ヌスビトハギの植樹
- ☆対馬高等学校ユネスコスクール部の生徒
 - ・保全活動を通してのワークショップ

③小学校におけるESD授業の見学

- ☆知島英史教諭
(対馬市立仁田小学校教諭)
- ☆平山俊章校長
(対馬市立厳原北小学校校長)
- ・ふるさと学習の授業見学



【考察】

結果から導き出された地域創生の可能性と課題に焦点を置いて簡潔にまとめる。

《可能性》

“当たり前”を問い直すきっかけを得た→普段「食のつながり」を意識していないことを自覚。エシカル消費などが自分たちには何ができるのか”を考えていきたい。

当事者意識を育む→保全活動への意見交換で、「みんなでやってみよう」というテーマについて考えることにより、活動を“やらされている”から“やる”“今後やりたいこと”などに視点が変化した。

幅広い地域に関心を向けるきっかけづくり→ふるさと学習やSkypeを使った授業で、自分の地域だけではなく他の地域の理解も深めることができる。

《課題》

地域で格差が生まれる可能性→ESD教育には地域の協力が必要となる。周囲の環境によってはそれが難しい可能性がある。

人手不足→ESD教育を実践するための知識や経験をもった人材の確保や重労働である保全活動にどのように人を確保するか。